

# 青山大介さん

(鳥瞰図絵師)

## 「オレがやらなきゃ」と思ったんです

鳥瞰図を眺めると時間を忘れてしまう——そういう人も少なくないだろう。鳥の目で、街や建物や地形を見る楽しさ。そのぶん、さぞや制作は困難を極めるはず。  
鳥瞰図絵師・青山大介さんに聞いた。

鳥の目で街を見る

——いつから鳥瞰図絵師を志したのですか？

鳥瞰図絵師として生きていこうと決意したのは、二〇〇五年の十月です。

初めて鳥瞰図と出会ったのが、その十二年前の一九九三年。十七歳のときでした。母校の神戸工業高校に先輩方が作った作品を置いておく倉庫代わりに使っていた部屋があり、そこで偶然、数年以上の先輩が書いた巨大な神戸の鳥瞰図を見つけたんです。

せんでしたが、いま振り返るとそうなりますね。

多くの出身は神戸市長田区。大好きでなじみ深い神戸が、港から北野の異人館まで細部まで詳細にびつりと描かれていました。圧倒的なリアリティと迫力がありました。

もともとぼくは、外で遊ぶのが苦手で、家で絵を描くのが好きな子供でした。運動神経がよくなくて、球技が苦手だった。ほかの子供たちが遊び回っている時間帯、ずっと家で絵を描いていました。だから友達もいなかった(笑)。

でもそのおかげで、運動はダメだったけど、絵の腕は自ずと上がっていったんじゃないかと思えます。子



●あおやま・だいすけ 1976年、神戸市生まれ。鳥瞰図絵師・石原正の作品に感銘を受け、2005年から鳥瞰図制作を始める。初の大作「みなと神戸パースアイマップ2008」で注目を集め、鳥瞰図の魅力を広める活動を続けている。

なんじゃ、こりゃ？ と一目で引き込まれました。

先生に、「倉庫の奥にある神戸のでっかい絵はなんですか」と聞くと、「あれは石原正さんという都市鳥瞰図の第一人者の作品を卒業生が四十人がかりで拡大模写したんだ」と、石原さんが描いた『鴉の目、俺の目』(東方出版)を見せてくれたんです。さっそく読むと、石原さんの半生とともに鳥瞰図の制作過程が書いてあった。「こんな面白い人、おんねんな」と思いました。

——人生を変えるくらいの衝撃を受けたんですね。

その当時は自分が鳥瞰図絵師になるとは考えもしま

供のころから自然の風景を描くよりも、家とか橋とか「硬いもの」ばかりを好んで描いてました。またぼくは地図も好きで、『スーパーマップル』(昭文社)を見ながらニヤニヤしているようなヤツなんです。

ぼくが好きな「硬いもの」の絵と地図が、石原さんの都市鳥瞰図と重なった。「この人、すげえやないか」と衝撃を受けたんです。

——鳥瞰図絵師だけでは食うのは難しいですよ。

ええ。だからすぐにアクションを起こして、鳥瞰図を描いたわけではないんです。ぼくは一九九四年に高校を卒業して、大阪にある内装工事を請け負う会社に入社しました。阪急梅田駅の地下にある紀伊國屋書店には大きな地図コーナーがあるんですが、帰宅途中に寄ると石原さんの鳥瞰図が売られていた。

京都、大阪、神戸……。欲しいヤツから順番に買集めていき、ラインナップを増やしていきました。

——石原さんの鳥瞰図を見て、いつか自分も、と勉強していたわけですか。

いえ、全然(笑)。一ファンとして「ここはどうなってるやろ」と一つひとつの建物を細かく見て楽しんでいました。